

曾山幸彦と浅井忠が描いた『婦女鑑』の西洋訓話挿画

杉 江 京 子

はじめに

『婦女鑑』は明治天皇の皇后美子の命により、明治二十年七月に刊行された女子用修身書である(図1)⁽¹⁾。明治天皇の命により、明治十五年十二月から翌明治

十六年一月にかけて刊行された『幼学綱要』⁽²⁾と対をなす修身書で、婦女子の徳性を養い育てることを目的に編修された。⁽³⁾その編修には宮内省文学御用掛であった西村茂樹(編纂)、山田安栄(校勘)、加部厳夫(修文)の三人がたずさわった。当書は六卷六冊の木



図1 『婦女鑑』

版本で、女性にまつわる百二十の訓話(日本の訓話三十四、中国の訓話三十三、西洋の訓話五十三)からなり、その四割あまりに挿画が付されている。

挿画は全部で五十図あり(日本の訓話十四図、中国の訓話十四図、西洋の訓話二十二図)、和漢にまつわる話の図は松本楓湖が制作した。西洋にまつわる話の図全二十二図には、「曾山幸彦原圖楓湖摹」(図2)⁽⁴⁾の印章が付されており、曾山幸彦が描いた原図を松本楓湖が写し、それを版本に仕立てたものであることがわかる。

『婦女鑑』に関する研究はすでに着手されているが、西洋訓話挿画の制作依頼過程、画作者の選定などに関する具体的な追究はまだ試みられていない。⁽⁵⁾本

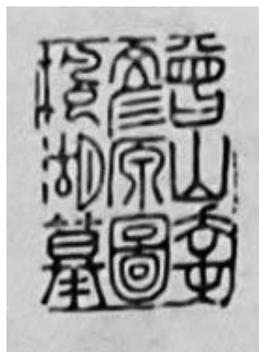


図2 印章
「曾山幸彦原圖楓湖摹」

稿では、『婦女鑑挿画原図及草案図 上』⁽⁶⁾及び『婦女鑑挿画原図及草案図 下』⁽⁷⁾等の資料を読み解きながら、西洋訓話挿画の成立事情を明らかにしてゆく。

また、本調査をとおして、浅井忠も『婦女鑑』の西洋訓話挿画の原図を描いていたことが判明した。それらは不採用となったが、今まで提供されたことのない作例なので提示する。

西洋訓話挿画と工部大学校

参照する資料は三点ある。『婦女鑑挿画原図及草案図 上』は折本で、『婦女鑑』西洋訓話挿画として採用された原図二十二図(どれも縦18 cm前後、横26 cm前後)が綴じられている。これらは曾山幸彦によって描かれた。内訳は「S Soyama」(図e)のサインが付されているもの七図、「Soyama」のサインは五図、サインの付されていないもの十図である。曾山幸彦については「そやまゆきひこ」と呼ばれることもあるが、「S Soyama」のサインから判断すれば「そやまざちひこ」と読むべきであろう。

『婦女鑑挿画原図及草案図 下』は折本で、浅井忠が描いた『婦女鑑』西洋訓話挿

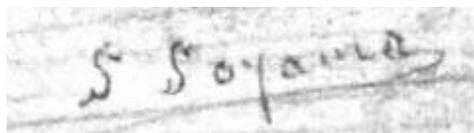


図3 曾山幸彦 原図のサイン「S Soyama」
『婦女鑑』三巻：題目「貧老嫗儲金を人に恵む」

画の原図十図(どれも縦18 cm前後、横24 cm前後)と、狩野良信が描いた十一図(浅井の原図に基づいた版下用の絵が十図、曾山の原図に基づいた版下用の絵が一図)、作者不明の二図、計二十三図が綴じられている。これらは不採用となった図であるため、『婦女鑑』の挿画の考察対象からはずされてきた。

『婦女鑑・明治孝節録出版録』⁽⁸⁾は、明治二十年から四十四年までの『婦女鑑』と『明治孝節録』にかかわる文書資料であるが、『明治孝節録』に関する記載は少なく、大半は『婦女鑑』にまつわる事項の記載だと言ってよい。大臣、次官等の署名や印章が付された決裁書のほかにメモも含まれている。メモの中に「婦女鑑編修日記」(以後「編修日記」と記す)⁽⁹⁾があり、この日記は挿画成立の経緯を記載した貴重な文書となっている。

「編修日記」の記録をたどると、明治十四年四月四日に「女訓ノ書九部修史館ヨリ借用」とあり、この辺から『婦女鑑』を作成するための準備が始まったようであるが、挿画については遅れること約一年八カ月、「挿画ノ事出版ノ事等取扱向キ侍講ヨリ再達 山田へ」(明治十五年十二月二十六日)とあるのが初出である。「侍講」は、当時一等侍講であった元田永孚のことであろう。「山田」は当時宮内省七等属、内事課の山田安栄で、この「編修日記」を記した人物と考えられる。⁽¹⁰⁾

その後しばらくのあいだ、挿画についての記事はとぎれる。再び以下のように記載されたのは明治十八年十月二十日のことである。

「婦女鑑洋画工部大学校写 西村殿ヨリ受取 彫刻草子担任ノコト 山田へ命アリ」(明治十八年十月二十日「編修日記」)。

山田安栄は工部大学校が用意した『婦女鑑』の洋画挿絵を西村茂樹から受け取り、その版刻業務と『婦女鑑』出版の担当者となることを命じられたという内容であろう。「編集日記」には記載されていないが、「婦女鑑洋画」はその日より前に発注されていたはずで、それが出来上がったので十月二十日に受け取ったのだと想定される。

そして『婦女鑑挿画原図及草案図 下』には、同日付で鉛筆画四枚、石版画六枚を「西村氏」から受け取ったというメモと共に、同じ図柄の二枚の洋画がファイルされている。メモの記述内容は以下のとおりである。

「十八年十月廿日 西村氏ヨリ落手ノ鉛筆画四枚 内フアージナントー図一枚上木ノ石板画六枚」(以上は墨書であるが「内フアージナントー図一枚上木」の下に鉛筆で「第七」、「石板画2」の記載が確認される)。

このメモを残した人物は、その筆跡からも山田安栄で間違いないと思う。山田安栄は、「十八年十月二十日」に鉛筆画四枚と石版画六枚、計十枚を西村茂樹から受取った。

二カ所の同日の記載を一つにまとめると、『婦女鑑』の担当官に指名された山田安栄は、工部大学校が作成した『婦女鑑』西洋訓話挿画にかかわる鉛筆画四枚と石版画六枚、合わせて十枚を西村茂樹

から受け取り、鉛筆画四枚のうち「フアージナントー図一枚」は版木におこすことにした、という内容になる。「フアージナントー図」を含め、工部大学校から受け取った鉛筆画・石版画の図柄がどのようなものであるのかははっきりしない。

しかしながら『婦女鑑挿画原図及草案図 下』にみられる十月二十日の張込メモの左頁(図4)と次の頁(図5)に、槍で戦う二人物の同図が掲げられているので、たぶん、この二点は工部大学校から受け取った作例と推測される。図4も図5も石版画であろうと思われる。画作者はおそらく曾山幸彦であろう。図5には、「アグネスホ



図4 作者不明
『婦女鑑挿画原図及草案図 下』



図5 作者不明
『婦女鑑挿画原図及草案図 下』

トツト父に代て敵と闘ふ図」と画題が表記されている。これは『西洋列女伝』に載る訓話に基づく図ではないだろうか⁽¹²⁾。土地所有権を決めるために武を競うことになった父親が急な病で倒れた。父親の名譽と土地の権利を守るために、娘のアグネス・ホトットは甲冑を身に付け、馬にまたがり敵と闘い勝利した、という話である。図4と図5はその闘いの場面であろう。このような孝行娘の話は、『婦女鑑』には掲載されていない。『幼学綱要』でもそうであったが、当初には掲載候補にあげられていた訓話が、最終的には省かれてしまうことがあるので、そういった例と同様、この訓話は採用取り消しとなり、当然その挿絵も用いられることなく終わった。

山田安栄が「婦女鑑洋画工部大学校写」を受け取ったその一週間後に、西洋訓話に関する挿画の制作が工部大学校に委任され、和漢訓話の図のそれは松本楓湖に命じられている。

「婦女鑑六冊西村殿ヨリ受取 洋画ハ工部大学校へ委任シ 和漢ノ画ハ松本楓湖へ被命旨口達」(明治十八年十月二十七日「編修日記」)。

さらにその二日後には以下のように記載されている。

「工部大学校長竹田春風へ面会 挿画ノコト引合ス 木版下二写スコト 代料ノコト 成業期限ノコト 事実選択ハ画手ノ意ニ任スコト 毎回草稿検査ノコト」(明治十八年十月二十九日「編修日記」)。

十月二十日に鉛筆画四枚・石版画六枚を受け取り、鉛筆画の一枚を版木に仕立て(当然木版画も摺った)つつ、山田安永が中心となつて検討した重要事項の第一は、西洋訓話の図を工部大学校にまかせることであった。そして第二には、その挿絵図版に石版を用いるか、木版を用いるかが検討されたに相違ない。その結果、挿絵の原図は工部大学校に作成を依頼するが、『婦女鑑』にはそれを木版画にしたものを使用するという事に決まった、というのが、以上の資料から読み取れるところである。『婦女鑑』の凡例に書かれている以下の文言も、この解釈を支持しよう。

「巻中挿ム所ノ洋図原本 欧法鉛筆ヲ以テ濃淡精描ス 而テ刻刀墨刷 和工未ダ精好ナラズ 已ムコト無クシテ 而テ和法ヲ以テ複写雕鏤ス」⁽¹³⁾。

なお十月二十九日の記述にある「代料」は制作代価、「成業期限」は制作期限である。「事実選択ハ画手ノ意ニ任スコト」というのは、おそらくどの話に挿絵を付するかは画家にまかせるということであろう。「毎回草稿検査ノコト」は、原図が提出されることにその図で良いかどうかを検討するということである。「画ノ野工部竹田へ廻ス」(明治十八年十月三十一日「編修日記」という記述があるが、これは挿絵のサイズの基準となる外枠見本のようなものを、工部大学校の竹田春風に送ったという意味ではないだろうか。

工部大学校ならびに竹田春風についてふれておく。

明治三年十月に工部省が設置、四年四月に工学寮の設立が建言さ

れ六年に開校、工学寮は十年一月に工部大学校と改称。工部美術学校は工学寮に付随するものとして前年の九年十一月に開設、十六年一月に廃校。十八年十二月に工部省が廃止、工部大学校は文部省に移管。翌明治十九年三月一日帝国大学令が制定、旧東京大学と工部大学校の事業を継承する新しい機関としての帝国大学が創設。工部大学校は帝国大学の一分科大学、工科大学として位置づけられた。⁽¹⁴⁾

「編修日記」における工部大学校の記録は、同校が工部省から文部省に移管される直前の明治十八年十月二十日から三十一日までのわずか十日あまりのことである。その間に、挿画制作にかかわる画家の人選を含めた大概のことが決定されたようだ。作成期限もあるが、移管される前に多くのことを決めておきたい同校の意向も働いたのではないか。

工部大学校の実質的な協力者であった竹田春風については、明治二十一年十二月に作成された略歴が残されている。⁽¹⁵⁾ 弘化二年五月生の山口県士族で、明治三年二月民部省燈明台御用掛、同年十二月工部省、六年七月工部少丞、七年鉄道助、十年十月工部省書記官、十五年十二月工部大学校副長、十八年十二月二十二日工部省から文部省工部大学校（「事務従前ノ通取扱フヘシ」とある）、明治十九年三月三日に文部省非職となる。

竹田春風は工部省に長く勤め、工部大学校副長であったが、「長長アレハ副長ヲ置カス」、「副長 副長アレハ長ヲ置カス」と規定されているので、校長と同等の職であった。⁽¹⁶⁾ 同校が明治十九年三月一

日に工科大学になったその二日後に、竹田春風は文部省を非職となった。なお、明治十九年三月一日から工科大学学長に就任した古市公威は、旧東京大学理学部関係者で、当時内務省土木局も兼務していた。⁽¹⁷⁾ この名は、「編修日記」には記されていない。

挿絵原図を描いた曾山幸彦

先行研究によれば、曾山幸彦（安政四年一月生）は鹿児島県岩崎に曾山芳徳の次男として生まれ、曾山幸彦の伯父とも言われている高崎正風に促されて明治九年に上京、麹町の某塾に入り傍ら日本画も学んだ。十一年四月に工部美術学校に入りサン・ジョヴァンニに学び、十三年十月には画学助手、十六年一月に修業証を取得、同年二月から工部省御用掛を拝命、工部大学校図画教場掛兼博物掛。十七年に画塾を開き岡田三郎助や和田英作等を育てる。二十年三月東京府工芸共進会審査員になり、二十一年五月工科大学助教授、二十三年第三回内国勧業博覧会に《武者試鶴図》を出品し褒状受賞。同年親戚である大野家の養子となり、大野姓を名乗り死の直前に名前を義康に改名。明治二十五年没、享年三十六歳（かぞえ年）。⁽¹⁸⁾

『改正官員録』⁽¹⁹⁾における曾山幸彦の肩書等にもふれておく。前述したように曾山は、明治十六年二月に工部省御用掛を拝命したとある。だが、工部省「御用掛准任」の肩書が『改正官員録』に初めて記

されるのは同年六月のことで、以後明治十九年一月まで続く（御用掛准判任「曾根幸彦」の名は明治十六年四月と五月にある、誤記されたものか）。明治十九年一月は工部省が廃止され文部省工部大学校に移管された翌月にあたるが、曾山は文部省ではなく工部省の職員として記されている。しかし、同年二月、三月には文部省工部大学校の御用掛准判任と記載されているところをみると、移管措置として明治十九年三月までは文部省におかれた工部大学校があったと考えられる。四月以降、曾山の名も文部省工部大学校の名もない。

曾山の名は明治十九年四月から一旦途切れるが、二十一年七月に工科大学の助教として、二十四年二月からは曾山幸彦ではなく大野幸彦の名で明治二十五年一月まで記されている（曾山が大野家の養子になったのは、明治二十三年と指摘されている²⁰）。同年二月は不明であるが、翌三月には大野幸彦の名はもうない。明治二十五年一月十日に死亡したので、同年一月の『改正官員録』には載ったがその後は削除された。現職のまま死んだようだ。また、曾山の月俸については明治十七年頃、十五円であった。以上が『改正官員録』から知れる曾山の履歴である。

前述したことをふまえ、曾山にかかわる「編修日記」の記録を解読していく。西洋訓話挿画が工部大学校へ委任された明治十八年十月「編集日記」には、副長の竹田春風の名前は記されているものの、画家の名の記載はない。あくまで委任は工部大学校になされているのであって、その描き手が誰であるかは明示する必要がなかつ

たからであろう。しかし挿絵の仕事をしていたのは、その頃同校に奉職していた曾山の可能性が高いし、前述した工部大学校へ依頼された「フアージナントー図」を描いた画家も、曾山とみるのが順当であると思われる。明治十八年から二十年に至る『改正官員録』の工部大学校と工科大学の官員を調べたが、曾山以外に工部美術学校画学科に学んだ人物を見つけることはできなかった²²。

さて、「編修日記」に西洋画家の名が初めて記されるのは、以下引用する明治十九年三月二十一日のことであり、その画家の名は曾山幸彦である。

「曾山幸彦ノ件ニ付文部省へ出頭 学務局員野呂邦之助へ引合ス 翌日差支断候旨文部省ヨリ本省へ回答ノ由」。

恐らくは三月いっぱいまで文部省に仮設置された「工部大学校」はなくなる、そのタイミングで山田安榮は曾山の件で文部省へ出頭し、同省七等属であった野呂邦之助に会うのである²³。すでに挿絵の仕事は開始されている。その継続をどのように実現するかが課題となる。宮内省側とすれば工部大学校を引き継ぐ工科大学がこれまで通り継続してくれば話は簡単である。そのためには曾山が工科大学の本官でなければならぬ。しかし「翌日差支断候旨文部省ヨリ本省へ回答ノ由」と続き、実現出来なかったことがうかがわれる。

あとで言及するが、明治十九年四月七日付の画料にかかわる記録、及び同年五月二十一日付の絵図の受け取りにかかわる記録には、曾山の所属は「工科大学員」、「工科大学」となっており、これ

は明らかに文部省へ移管された「工科大学」を指している。曾山は明治十九年から二十一年前半期までの『帝国大学一覽』では、工科大学造家学の「助手」と記されている⁽²⁴⁾。しかし、助手時代の曾山の名は官員録には見当たらない。曾山の名がかつてのように『改正官員録』に登場するのは、二十一年後半期に助教授となつてからである。「帝国大学令」(明治十九年三月二日勅令第三号) 第十一条によれば、「教授」「助教授」は帝国大学職員であるが、助手は大学の構成人員に含まれておらず、助手時代の曾山には正規の官員資格は与えられなかつたようである。

官員ではない浅井忠、松本楓湖などと同じように、曾山幸彦に「画料」が支払われているのも、そうした事情と関係があるのだろう。曾山が正規の官員であるなら、「画料」は俸給の中で処理されるのが通常であろう。同年四月七日付の記録を引用する⁽²⁶⁾。

「婦女鑑挿画内訳／和漢図廿八枚 松本楓湖筆 一枚代価金粗四円密四円五十銭／西洋原図十二枚 工科大学員曾山幸彦筆 一枚代価金六円／同上写 松本楓湖写 一枚写代金四円五十銭／同上原図十枚 浅井忠筆 一枚代価金五円／同上写 狩野良信写 一枚写代金式円／以上和漢洋図数五十図／右十九年四月七日調度局田村へ申込」。

これは画料の支出に関する文書である。後で詳述するが、曾山と浅井はこの時、『婦女鑑』の西洋訓話挿画の原図を分担して描いていた。曾山の「西洋原図十二枚」は、一巻から三巻の原図十二枚の

ことで代価七十二円が、浅井の「西洋原図十枚」は四巻から六巻の原図十枚のことで、代価五十円がそれぞれに支払われた。

工科大学校が工科大学に移行した後、曾山は正規の職員でなくなつたとすれば、職員であつた時と同じ俸給は支払われない。曾山の明治十七年の月給は十五円であるので、職員の時の年収は百八十円となる。後で解説するが、浅井が担当した十枚の挿絵が廃止となり、曾山は浅井の十枚も引き受け、その後約一年かけて仕上げた。既に描き終わっていた十二枚を含め、西洋訓話の挿絵全二十二枚を描き、合計百三十二円(一枚六円)の画料を手に入れる。それは、曾山が本官であつた時の年収の七割余りに充当する。

次に、明治十九年五月二十一日付文書を引用する⁽²⁷⁾。

「證／婦女鑑洋画原図二十二枚／此内訳／拾二枚 工科大学 曾山幸彦筆／拾枚 浅井忠筆／同原図ノ写 十枚 狩野良信写／右之通正ニ落手致候也／明治十九年五月廿一日 内事課山田安栄／調度局御中」。

山田安栄が明治十九年五月二十一日に、原図二十二枚を受け取つたことを示す文書である。曾山も浅井も遅くとも五月二十一日までには、分担の絵図を描き終わり宮内省に搬入し、その五日後に画料を受け取つた⁽²⁸⁾。明治十八年十月二十九日に山田安栄と竹田春風の間に取り決められた「成業期限」は、画家たちが絵図を搬入した明治十九年五月二十一日であつた可能性が高い。だから、そこにむけて急いで分担制作がおこなわれたと推測する。

明治十九年三月二十七日「編修日記」に遡る。「曾山幸彦へ画ノ事引合ス 奥田象三へ手分け云々 曾山より返紙来ル」とある。奥田象三は『婦女鑑』にかかわった一人である。安政四年五月に京都に生まれ、明治八年上京して工学を修め、工部大学学習院建築局、内務省土木局等に奉職、その間に英国人建築家ジョサイア・コンドルに就き建築学を修めた。⁽²⁹⁾ 奥田象三は明治十八年頃には工部七等属であり、曾山の直属の上司であったようだ。⁽³¹⁾ また、「手分け云々」とあるので、挿絵の分担に関する相談で、それが浅井忠に決まったと推測される。「手分け云々」が話し合われたその四日後の三月三十一日に、曾山から廻された草稿本を、浅井は実際に手に入れるのである。これについては次に述べる。

挿絵原図を描いた浅井忠

「草稿五ノ巻一冊 曾山ヨリ取寄せ 画工神田猿楽町十番地 浅井忠へ廻送ス」(明治十九年三月三十一日)と「草稿四六ノ二冊浅井へ廻ス」(明治十九年四月十二日)の「編修日記」から、浅井忠は明治十九年三月三十一日に曾山から廻された『婦女鑑』の草稿五巻と、その約十日後に四巻と六巻、併せて三冊を手に入れたとわかる。ここから推定されることは二点ある。曾山は当初、一巻から六巻の草稿本すべてを持っていて、『婦女鑑』の西洋訓話にまつわる挿絵のすべてを描くことになっていたこと、その後、明治十九年三月

三十一日に第五巻、同年四月十二日には四巻と六巻が浅井の手にわたったこと、すなわち曾山の担当挿絵は一巻から三巻で、浅井のそれは四巻から六巻となったことである。

ところで、『婦女鑑』の刊行前に、「婦女鑑原稿」、「婦女鑑西洋篇草稿」、「婦女鑑草稿」、「婦女鑑校正刷」(全て宮内庁宮内公文書館蔵)の四種の草稿本が作成されている。⁽³²⁾

「婦女鑑原稿」は手書きの原稿六冊からなる和装本で、序、判例、目録はない。朱で書き加えられたところや訂正箇所が非常に多く、付箋が何枚も貼られている。例話についての最も早い時期の稿本であるとの指摘もなされていることから、⁽³³⁾ それを画家に渡し、挿絵制作を依頼するとは考えづらい。

「婦女鑑西洋篇草稿」は手書きの原稿六冊からなる和装本である。西洋の訓話のみを集めたもので、和漢の訓話は一切載っていない。

「婦女鑑草稿」は手書きの原稿六冊からなる和装本で、朱で書き込まれた訂正箇所は多数みられるものの付箋は少なく、目録、判例なども添えられ、刊本に近い構成になっている。「婦女鑑草稿」の目次の西洋訓話の題名に、「圖」と印されている箇所があり、刊本『婦女鑑』の西洋訓話挿画と一致する。「曾山」「浅」と朱書されているところ、「浅」に朱の棒線が付されているところもある。

「婦女鑑校正刷」は六冊からなる和装本で、刊本の『婦女鑑』と同様木版摺りされ、挿画五十枚が揃っている。文字と図の訂正が指示されている。西洋訓話挿画には「曾山幸彦原圖楓湖摹」の印章が

付されていると

既に記したが、

「婦女鑑校正刷」

の一卷に載って

いる三図は、落

款は「楓湖寫」、

印章は「松本敬

忠」であった。

しかし、それら

には朱墨の棒線が引かれ、その上に「曾山幸彦原圖楓湖摹」の印章

が付された紙が貼られ訂正された(図6)。二巻以降の西洋訓話挿

画には「曾山幸彦原圖楓湖摹」の印章が付されている。

以上を考慮すると、曾山から浅井に廻された草稿本は「婦女鑑西洋

篇章稿」か「婦女鑑草稿」の四巻から六巻が可能性としてあげられる。

『婦女鑑』の草稿四巻が浅井に渡された二日後に、「浅井筆

若安達亜克、亜俄底那、二図 西村殿ヨリ受取 即日狩野良信

へ廻ス」(明治十九年四月十四日「編修日記」と記されている。

「若安達亜克」^{ジョアンダーダーク}と「亜俄底那」^{アゴスチナ}の訓話は、『婦女鑑』四巻に載る話で

あることから、浅井は四巻を廻されてから二日後に、これら二枚の

挿画を描き終わり、宮内省に提出したことになる。それが真実なら

はその筆の速さに驚かされる。

浅井の研究はさまざまなされているので、ここではその略歴につ



図6 落款：楓湖寫、印章：松本敬忠
「婦女鑑校正刷」一卷

いて詳しくはふれないが、明治九年から明治十一年の間、工部美術
学校に在籍していたこと、明治十九年代の浅井忠の経歴について
は、ほとんど分かっていることを指摘しておく。⁽³⁴⁾

浅井は明治六年一月に西村茂樹方に寄留していたのではないかと
の指摘もあるが、それについてはさておき、山田安栄は浅井の原図
を西村茂樹から直接受け取っている。つまり浅井は図を西村に届け
たことになる。それは以前からの知り合いであったことが関係して
いるのであろう。曾山との分担の際に、浅井が選ばれたことについ
ても、西村からの力添えがあったのかもしれない。

採用されなかった浅井忠の挿絵

「西洋画原図は曾山 写松本ニテ 浅井狩野ノ分不残認直し云々
御沙汰ノ旨西村殿ヨリ承ル」(明治十九年六月二日「編修日記」)。

一卷から六巻の西洋訓話挿画の原図は曾山幸彦、版下は松本楓湖
に決まり、浅井忠の原図と狩野良信の版下は廃止された。これを
決めた人物は元田永孚であろう。その前日の六月一日「編修日記」
に、「原図並二写シ元田殿ヲ歴テ御手元へ上ル 翌日御下」と記さ
れているからである。「御手元へ上ル」と「御下」の文言から、元
田は『婦女鑑』挿画の原図と版下を明治天皇か皇后、あるいは二人
に見せたことが想定される。その翌日に浅井の原図ははずされ、曾
山が浅井の十枚も引き受ける。すでに担当した十二枚に加え、原図

二十二枚を描くことになる。その全ては『婦女鑑挿画原図及草案原上』に、廃止となった浅井の原図十枚は『婦女鑑挿画原図及草案原下』に残されている(表1)。絵図の優劣についての記載はどこにもない。建前上明治天皇や皇后の意向という形をとって、最終的に元田永孚が画家の人選をしたことが考えられる。

こうして浅井忠の記録は終わるが、浅井がはずされた理由はそれだけだろうか。工部省から文部省へ移管した後の曾山幸彦の処遇も一因をなしていた可能性がある。本官でなくなった曾山の救済措置として全部の挿絵を描かせ、その報酬として職員だった時の年俸百八十円に近い収入を確保する、という可能性である。曾山にかかわる「編修日記」の記録としては最後となる明治二十年六月二日に、「曾山改正図十二枚代金七十二円調度局ヨリ受取 三日同人へ渡シ同人受取証壹通調度局へ差廻ス」とある。曾山が描いた図十二枚(四巻から六巻の挿絵十枚のことであるが、その内二枚は描き直しが命ぜられたので計十二枚)³⁶の代金は、同年六月三日に支払われた。その一年ほど前に一巻から三巻の挿絵の代金七十二円が支払われているため、曾山は約一年間で百四十四円を得た。

浅井の原図がはずされたので、『婦女鑑』の草稿四巻から六巻は、明治十九年六月二十二日に曾山に戻され、西洋訓話挿画十図を新たに描くことになる。³⁷表1のとおり曾山と浅井が、同じ題目で描いた図は十図の内六図である。題目「亞俄底那敵を却けて軍功を奏す」を例に曾山(図7)と浅井(図8)を見比べる。亞俄底那^{アゴスチナ}は十九世

表1 『婦女鑑』の西洋訓話挿画の一覧表

『婦女鑑』の西洋訓話挿画に採用された図(合計22図)		不採用となった図(合計10図)	
巻号	『婦女鑑』西洋訓話挿画に付されている題目	原図制作者	原図制作者
1	路易斯(ルウキズ) 女盲父を慰藉(いしゃ)す	曾山幸彦	
2	孝女齒科醫の恵を受く	曾山幸彦	
3	百底安波(ベチーアムボス) 兄の死を聞いて悲悼す	曾山幸彦	
4	塞斯達(ゼスター) 暴君を諫む	曾山幸彦	
5	匪地難多(フアジナント) 妻の諫書を読む	曾山幸彦	
6	安(アーン) 夫の業を輔援す	曾山幸彦	
7	亞耳巴地(アルバーチ) 侯の夫人鑛事を執る	曾山幸彦	
8	貧老嫗儲金を人に恵む	曾山幸彦	
9	利禰(リネ) 隣人の不幸を救慰す	曾山幸彦	
10	維爾孫(ウキルソン) 印度の女子を教ふ	曾山幸彦	
11	聚侃(ヂュガン) 貧院を興して不孝の者を救恤(きゅうじゅつ)す	曾山幸彦	
12	額黎(グレイス) 醜を犯して漂艦を濟ふ	曾山幸彦	
13	舌弗爾(シエフェル) の母子の像に対して書信を作る	曾山幸彦	
14	藍巴耶(ラムバエー) 節義を執て法廷に争議す	曾山幸彦	浅井忠
四巻	【訓話はあるが挿絵はない】		浅井忠
15	四巻 若安達亞克(ジヨアンダーク) 戰場より使者を敵軍に遣る	曾山幸彦	白命透(ベトロニトウ)
四巻	【訓話はあるが挿絵はない】		浅井忠
16	四巻 亞俄底那(アゴスチナ) 敵を却けて軍功を奏す	曾山幸彦	浅井忠
17	五巻 諸學士羅拉(ローラ) の學術を試験す	曾山幸彦	浅井忠
18	五巻 路古勒西(ルクレシヤ) 恩金を父に奉る	曾山幸彦	浅井忠
六巻	【訓話はあるが挿絵はない】		浅井忠
19	六巻 葛羅周(グロチユース) の妻良人の難を救ふ	曾山幸彦	浅井忠
六巻	【訓話はあるが挿絵はない】		浅井忠
20	六巻 蘇瓦突堡(シユワルツブルグ) の女侯伏兵を露はす	曾山幸彦	浅井忠
21	六巻 哥爾涅利(コルネリ) 幼児を率ゐて會席に入る	曾山幸彦	浅井忠
22	六巻 看護婦誠を盡して病者に接す	曾山幸彦	浅井忠

*1. 刊本『婦女鑑』の西洋訓話挿画にはとおし番号(1~22)をつけ、不採用の図も訓話の順番に従って配した。

*2. 挿画の題目、訓話の題名、仮名遣いについてはそのまま記した。

*3. 人名については、()でくくり、『婦女鑑』の読みをそのまま記した。

*4. 読みの難しい漢字には()でくくり、ふりがなをふった。



図7 曾山幸彦 原図
『婦女鑑』四卷：題目「亞俄底那敵を却けて軍功を奏す」



図8 浅井忠 原図：亞俄底那

紀初頭のスペイン、サラゴサに生まれ育った信仰心の篤い勇氣ある女性で、フランス軍と勇敢に闘い敗走に至らせた。「婦女鑑草稿」四巻に載る「亜俄底那」の一部を原文のまま引用する。

「二人の處女ありて。身には白き衣を着。かみをふりみだし十字架を頸に懸けて。那斯多拉同拿の礼拝堂を出でたり。人々驚きてこれを見るに。眉秀で眼すゞやかにして眞に神女の如くなるが。徐ろに歩を進めて彈丸兩注の場に来りしとき。一砲卒の丸を装めて未だ発せざるに。敵の飛丸に中りて重傷を被り倒れたれば。彼の處女直に其手より火繩を取りて彈丸を敵軍の直中に発し。発しては装め。装めては発し。其間には頸に架けたる十字を吸ひ。大聲に。死ねよ。勝てよ。とよばる、聲。忽ち軍士の耳に入り。兵氣為に十倍し。この敗軍を支へて法軍を打靡けしは。宛も天兵の冥助を得たるが如く。衆口同音に。亜俄底那萬歳とぞ呼たりし。」

浅井のアゴスチナ(図8)はこの文章を忠実に描いている。身にまとった白い衣装、髪は乱れ、首にかけた十字架のネックレスも描かれている。そして負傷した兵士を前にして火繩を力強く持ち、大砲の前に立ち、敵軍を征する姿で描かれていて巧妙である。

曾山のアゴスチナ(図7)は白い衣装を身に付け、フランス軍に銃を向けている姿で描かれている。十字架などは確認できない。群衆の中の一人として表現されていて、アゴスチナを見つけるの到手間取る。浅井の方が文意に沿った表現で優れている。

刊本『婦女鑑』の西洋訓話挿画をみれば曾山が描いたその原図

の見当はつくが、浅井忠の原図はこれまで紹介されたこともないし、『婦女鑑』にも採用されておらずその図様をうかがい知るすべもないので、のこる九点の原図および訓話の概要を以下にあげておく。なお、以下に示す「達渉夫人」および「巴威畧の達渉」の「達渉(ダツチエス)」は人名ではなく公爵夫人を示す“duchess”なのであろうが、訓話の概要は『婦女鑑』の叙述に即して記載する。

○藍巴耶(図9) 皇后マリー・アントワネットの女官であったイタリア人ラムバエーはフランスが乱れたので逃げたが、皇后の恩に報いるためパリに戻り牢獄につながれた。裁判官はその忠義心と義烈を知り許したが民衆に殺された。後に褒め称えられた。

○白倫透(図10) イスパニア国陸軍大佐の召使いの子供として生



図9 浅井忠 原図：藍巴耶



図10 浅井忠 原図：白倫透



図11 浅井忠 原図：若安達亞克



図12 浅井忠 原図：撤拉倍涉



図13 浅井忠 原図：路古勒西馬利大關遜



図14 浅井忠 原図：達涉夫人

まれたベトロニトウは、父の遺訓を胸に無一文の主人に仕え、病の母と姉の面倒もみた。寝食を忘れ働らき、主人、母、姉の順番にものを食べさせ、衣服を与えた忠と孝を備えた女の話。

○若安達亞克（図11）ジョアンダーク ジョアンダーク（ジャンヌダルク）はフランスの敬虔な農夫の娘として生まれた。勤王愛国の志深いジャンヌダルクは神の啓示を受け、甲冑に身をかため帯刀しフランス軍の陣頭に立ち、イギリス軍と戦い勝利を収め国民を救った。その後イギリス軍に捕われ火あぶりの刑に処せられた。

○撤拉倍涉（図12）ペーチェ アメリカがイギリスから独立する際に、手柄を立てたフランクリンの娘に生まれたペーチェは、教育を受け国のために尽くしていた。貴婦人達を説き伏せ、その財力と労力を費やして肌着を作り、軍人に送る等米国婦人の模範となった。

○路古勒西馬利大關遜（図13）ルクレシヤマリアグッドソン アメリカのルクレシヤは貧しいため学校へ通えなかったが頭が良い子で、詩作したものが本となった。売れた本のお金を、病気の母親の為に使うように父親に差出す孝行娘であった。支援を得て漸く学校に通えるようになり勉学に励んだが、勉強をし過ぎて病に倒れ、若くして死んだ。

○達涉夫人（図14）ダツチエス フランスのダツチエス夫人の夫は誤解のために政府軍に攻められ城にこもった。城の前に連れてこられた夫人は命を張って怯むことはなかった。その姿に心打たれた敵兵は夫人を殺せなかった。後に公爵の無実が分かり許された。

○巴威畧の達涉（図15）バワリア バワリア（バイエルン）公とドイツ皇帝の間で戦争が起こった。バワリア公夫人のダツチエスは、夫の危急を救うため一計をめぐらし夫とその部下と婦人達を救った。夫



図15 浅井忠 原図：巴威罌の達渉



図16 浅井忠 原図：蘇瓦突堡の女侯



図17 浅井忠 原図：仁恵婦女社の看護人

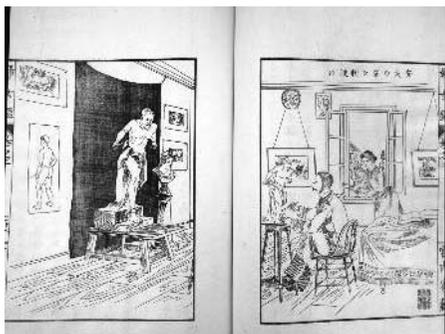


図18 曾山幸彦 原図、松本楓湖 版下
『婦女鑑』二巻：題目「安夫の業を輔掖す」

人の情け深い心に打たれた皇帝は、全ての人々を許し救った。

○^{シエワルツブルグ}蘇瓦突堡の女侯（図16） ドイツの將軍達を招待した女侯は、兵隊が領地の人民に悪さしないように要請したが聞き入れられなかったため將軍を取り囲み、命が欲しければ従うように言った。部下に命令し盗んだものを返させた將軍等は女侯から許された。

○仁恵婦女社の看護人（図17）仁恵婦女社は戦争で負傷した人を看護する所で、辛抱強く接する婦人がいた。傷の痛みが激しいため死んだ方がましだと考えた兵士は、水薬を飲まずに投げつけ薬碗を砕いたが、看護人は説得し、兵士は水薬を服した。

浅井の絵図は、どれも訓話の内容を的確に表現していて秀逸である。

『婦女鑑』の西洋訓話挿画と、工部大学校に付属する工部美術学校とのつながりを示す図もあるので挙げる。『婦女鑑』二巻に掲載されている挿画で、原図曾山幸彦、版下松本楓湖、題目は「安夫の業を輔掖す」（図18）である。イギリスの彫刻家ジョン・フラックスマンの妻、安^アは夫がイタリヤへ行つて勉強できるようにお金を節約し成功に導いた。内助の功の話である。大熊氏広が『破牢』（図19、明治十五年工部美術学校卒業制作のための作品）を制作しているその情景を曾山がスケッチ⁽³⁸⁾して、『婦女鑑』の挿画に使ったのではないかと指摘されている。この原図が『婦女鑑』挿画原図及草案図⁽³⁸⁾に残されていることを確認した（図20）。



図19 大熊氏広：《破牢》



図20 曾山幸彦 原図
『婦女鑑』二巻：題目「安夫の業を輔掖す」

おわりに

『婦女鑑』の西洋訓話挿画が制作された時期は、その制作が工部大学校へ委任された明治十八年十月末に、曾山幸彦が描き手として指名された時から始まり、曾山が最後の画料を受け取った明治二十年六月初めには終わったことが想定される。制作は一年半あまりのことであるが、本稿ではその前半部分にあたる明治十九年六月までの「編修日記」を中心に解読した。それは工部大学校が工科大学へと移行する特殊な時期とも重なる。それ以後の記録も残されているが、それについてはまたの機会に譲る。

重要なことは、宮内省が出版した『婦女鑑』の西洋訓話挿画の原図は、工部美術学校で画を学んだ曾山幸彦が担当したことである。

曾山幸彦と浅井忠が描いた『婦女鑑』の西洋訓話挿画

そして、結果的に不採用となったが、曾山より先に同校で学んだ浅井忠も、曾山が指名された後に西洋訓話挿画の原図を分担して描いたことである。『婦女鑑挿画原図及草案図 上』及び『婦女鑑挿画原図及草案図 下』に保存されている絵図は、作品が非常に少ない天折の画家、曾山にとっては貴重な作品であり、浅井にとっては初期の業績を知らせてくれる重要な作品である。とりわけ本稿に例示した浅井の作例は、この画家の活動が不明であった明治十九年の作画営為を伝える基本資料とみなせよう。

なお、『婦女鑑』作成時の明治十九年頃、西洋画原図をそのまま彫刻し摺る技術がないために、日本画家の松本楓湖、狩野良信に版下を依頼し（大庭学僊も関与）、『婦女鑑』は完成されたことが本調査から判明した。これについては稿を改めて述べる。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、御尽力を賜りました東京大学工学系研究科建築学専攻技術専門職員、角田直弓様に深く感謝申し上げます。

注

- (1) 『婦女鑑』（宮内省 明治二十年）。
- (2) 「幼学綱要編纂事業」「宮内省の編纂事業」（宮内庁書陵部 平成十九年十月、四十四頁）。
- (3) 宮内庁『明治天皇紀』第六（吉川弘文館 昭和四十六年十一月）、八百二十四頁。

List=&facet=OpenedNodeIds=&criticOp=&detailSearchTypeNo=K&publisher=%2F%22%22%5F%8D%9A%6E5%85%AC%6F%9B%8E%99%99%A2%22%2F 閲覧

年月日、平成二十七年七月二十四日。

- (20) (註18) 前掲書、『近代日本美術教育の研究——明治・大正時代——』、二百三頁。

- (21) (註18) 前掲書、『建築雑誌』、二十九頁。

- (22) (註18) 前掲書、『油絵初学』、二百四十七～二百九十頁。『近代日本美術教育の研究——明治・大正時代——』、百八十二～百八十三頁。

- (23) (註19) 前掲書、『改正官員録』明治十九年上二月を参照。

- (24) 『帝国大学一覽』（帝国大学 明治十九年～二十一年）参照WEB：国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/813163>、<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/813164> 閲覧年月日、平成二十七年十月七日。

- (25) 『帝国大学令』『学制百年史』資料編（文部省 昭和四十七年十月）、百五十二頁。

- (26) (註8) 前掲書、追加第二十四号「婦女鑑帝室備品請求證其他」の明治十九年三月二十日付「帝室備品請求證」の次頁に、「婦女鑑挿画内訳」が綴じられている。

- (27) (註26) 前掲書、「婦女鑑挿画内訳」の次頁に綴じられている文書。

- (28) (註9) 前掲書、明治十九年五月二十六日「画料 曾山分 浅井分 狩野分 調度局ヨリ本人へ渡す」。

- (29) 「奥田象三君」「大日本人物名鑑」巻四の一（ループル社 大正十一年）、二百五十一～二百五十一頁。

- (30) 寺岡寿一『明治初期の官員録・職員録』第五卷（寺岡書洞 昭和五十五年三月）、百二十一、三百二十八頁。『明治初期の官員録・職員録』第六卷（寺岡書洞 昭和五十六年二月）、百四十四頁。

- (31) Sasaki Takanori, *The Calendar Of The Imperial College Of Engineering, Kobu-Dai-Gakko, Tokyo For 1885-86*. (The College Press, 1885) [Reprinted by Kessinger Publishing, LLC, 2010, pp. 15]. 奥田象三『曾山幸彦の“Administrative Staff”

の“Museum Keeper”と記されていて、奥田は曾山の上司となっている。また、曾山の名は「ちむひこ」と記されている。

- (32) (註5) 前掲書、『婦女鑑』に関する研究 草稿本の検討を中心に「八十九～九十三頁。『婦女鑑』の成立事情と徳目構成——編纂稿本と刊本の検討を中心に——」、百九十四～百九十五頁。

- (33) (註5) 前掲書、『婦女鑑』の成立事情と徳目構成——編纂稿本と刊本の検討を中心に——」、百九十四頁。

- (34) 石井柏亭「浅井忠年譜」「浅井忠」（芸艸堂 昭和四年十一月）、百六十五～百七十五頁。隈元謙次郎「浅井忠略年譜」「浅井忠」（昭和四十五年六月 日本経済新聞社）、五十五～五十九頁。（註18）前掲書、『油絵初学』、二百六十二～二百六十四頁。「年譜」「没後90年記念——浅井忠展」（京都新聞社 平成十年）、二百五十四～二百七十一頁。「関連年表」「浅井忠と関西美術展」（府中市美術館、京都市美術館、京都新聞社 平成十八年）、二百十～二百十七頁。

- (35) 高橋在久「浅井忠への旅」（未来社 昭和五十九年十一月）、二十七頁。（註34）前掲書、「没後90年記念——浅井忠展」、二百五十五頁。

- (36) (註9) 前掲書、曾山幸彦は明治二十年三月五日に訓話の題名「ローラ」と、明治二十年四月二十七日に訓話の題名「コルネリ」のあわせて二図の描き直しを命じられる。

- (37) (註9) 前掲書、明治十九年六月二十二日「曾山へ達す 四五三冊草稿渡す 九月十日頃迄二十枚出来ノ約」。

- (38) (註18) 前掲書、『近代日本美術教育の研究——明治・大正時代——』、百七十五～百七十九頁。

図版出典

【図1】・【図2】・【図6】・【図18】は、宮内庁宮内公文書館。

【図3】・【図5】・【図7】・【図17】・【図20】は、宮内庁書陵部。

【図19】は、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻。